

Key
Person



(株)湘南オールスターズ 代表取締役社長

金井 貴雄

17歳に経験した事故がきっかけで、障がい者として生活を送る金井社長は周囲の支えを受けながら、常にポジティブな気持ちを持ち続け、人々を支える側になるべく、『湘南オールスターズ』を設立した人物だ。自身が介護を受ける中、利用者の意思を聞き取り、その実現のためにサポートをするのがヘルパーの仕事だという考えに至った。利用者の声なき声に耳を傾け、彼らの思いを理解してそれを形にする——介護を受ける側にいるからこそ、利用者の気持ちに全力で寄り添えるのだ。そんな社長が牽引していく介護業界の未来は明るく輝いている。

(対談記事は78～79頁に掲載)

「利用者様の思いを形にする——
それが介護ヘルパーの仕事だと思います」

利用者の意思の実現を 全力でサポートしたい

COMPANY PROFILE

株式会社 湘南オールスターズ やえちゃん 訪問介護事業所

神奈川県藤沢市大鋸 1-11-14



Special Interview

訪問介護サービスを提供する『やえちゃん』。運営会社『湘南オールスターズ』を手掛けている金井社長が開設した。10代で大けがを負って以来車椅子生活を送っている社長。介護を受ける生活の中で、利用者の意思を実現するサポートをしたいという思いが芽生えたという。そんな社長のもとを本日はタレントの布川敏和氏が訪問。お話を伺った。

大事故の苦難も

前向きに乗り越える

——まずは金井社長の歩みを伺います。

17歳の時にオートバイ事故に遭い、首の骨を折る大けがを負いました。以来ずっと車椅子生活をしています。その後は大学で経済学を学び、卒業して福祉用具の会社に入社しました。そこで30年間勤務し、退職後に独立して『湘南オールスターズ』を立ち上げたんです。現在は、実家を改修し、グループホームで暮らしていた父を呼び寄せて、愛犬そら君と共に生活をしています。

——大事故を経験されたのですね。乗り

越えるのは大変だったのでは？

意外と楽観的に過ごしていましたね。リハビリの先生には「車の免許もすぐ取れるようになるよ」と言われ、前向きに出来ました。また、友人が毎週家に遊びに来てくれて、事故以前と変わらない生活を送れましたね。両親も嫌な顔1つせず世話をしてくれてありがたかったです。大学でも、バリアフリーが普及していない時代だったのでエレベーターがなく、2階以上の教室で授業がある時は、学生が車椅子を担いで上ってくれたんですよ。周囲の方々のサポートがあったお陰で常に前を向くことができました。

——素敵なお方ばかりですね。独立は以前

から考えておられたのでしょうか。

いえ、考えたことはあまりなかったですね。企業で働く中でノウハウや経験を培うことができましたし、学ぶことが多かったのですが、独立の必要性を当時は感じていませんでした。さらに、私の場合は着替えや食事といった日常生活を送るのに健常者の3倍くらい時間がかかるので、目の前の仕事をこなすだけで精一杯でした。そんな折、両親が病気になり、訪問介護が必要な状況になりました。それがきっかけでヘルパーさんと関わるが多くなりました。その中でヘルパーさんが色々悩みを打ち明けてくれ、アドバイスをしているうちに「訪問介護の世界で私が役に立てる場があるのでは」と思うようになったんです。また、私自身も企業で働いている時に実家を離れ、20年近く訪問介護を受けながら生活をしていました。そのためご利用者様の気持ちをより理解できる。それを介護の場で活かしたらと考え、独立しました。

——そういった経緯があったのですね。

訪問介護は仲間がいないと絶対にできない仕事ですので、設立まではとても悩みました。しかし、両親の介護をしてくれていたヘルパーさんに背中を押され、「挑戦してみよう」と決心することができました。また、事業所名の『やえちゃん』は、母が生前にグループホームでスタッフさんから呼ばれていたあだ名でし



布川 敏和

After the Interview

「10代で車椅子生活を余儀なくされた金井社長。それでも常に前を向き続ける精神力には脱帽しましたね。お話の中で『利用者の方々が自らの意思を発信し、それを実現することが重要』だと語っていただきました。そういった考えに行き着くのも、ご自身が障がいを抱え、介護を必要とする方々の気持ちに人一倍寄り添える社長だからこそだと思います。これからの介護業界を変えていく存在になっていかれるのでしょうか。今後の益々のご活躍を期待しています！」



代表取締役社長
金井 貴雄

神奈川県藤沢市出身。17歳で事故に遭い、車椅子生活を余儀なくされる。大学卒業後は福祉用具の会社で30年間勤務し、退職。介護の世界で役に立ちたいと2021年10月に『湘南オールスターズ』を設立した。

て。そのスタッフさんとはしばらく疎遠でしたが、ある時偶然再会し、現在は当事業所で共に働いてくれているんです。母が見つないでくれた不思議な縁ですね。このように、様々な形でたくさんの方に支えていただいているからこそ、独立を実現できたと思っています。

**声なき声を拾い上げ
利用者の思いを形にする**

——訪問介護と一言に言っても、いろんな形の事業所があると思います。御社はどのような事業所を目指されているのでしょうか。

利用者様の意思の実現を全力でサポートできる事業所ですね。前社の社長は障がいを持ちながらも一から会社を立ち上げた方です。その社長からはよくアドバイスを頂いていました。その中で、たとえば障がいがあったとしても、制度によって保証された生き方ではなく、常に挑戦する人生を選ぶことの大切さと、そのため環境づくりの重要性を教えてください、深く感謝をしています。私たちは障がいがあるが故に、教育や就職、結婚などといった場面で壁にぶつかることが少なくありません。そこを乗り越えて、利用者様が望む形で生活できる手助けをすることが我々の役割だと思っています。

——利用者様の生活の幅を広げるサポー

トをされているのですね。

そのために、まずは利用者様が自由に意思を表明できる環境をつくるのが大切です。例えば、仕事を掛け持ちしているヘルパーさんの中には、直前の仕事が忙しかったからと言って対応が乱雑になってしまう方もいらっしゃいます。そんな時に、ヘルパーさんがいないと生活できない利用者様は、ヘルパーさんの顔を窺ってしまうんですよ。そのような関係が成り立ってしまうと、安全な介助をしてもらいたいと思っても、利用者様は気持ちを表現するのが難しくなります。そういった状況に陥ることがないように、利用者様に安心していただける環境づくりを心掛けています。

——なるほど。利用者の方々が声を上げていく状況を変えていこうと。

2000年に介護保険制度が成立してから20年余りが経ちました。福祉業界は

まだまだ課題が残っている世界ですが、それでも少しずつ意識が変わってきているように思います。認知症の人でも「助けてほしい」と声を出すことはできる。そのような声をしっかり聞き取れるかどうか重要です。利用者様が平等に声を出せる環境づくりを目指していきたいと思っています。

——そのために意識して取り組んでいることはありますか。

スタッフの自主性を促すことです。例えばほこり1つでも誤飲性肺炎を引き起こす危険性があるので、掃除をこまめに行うことは大切です。そういった細かな気遣いが利用者様の理解を深めると思っています。スタッフが自主的に学び考えることを促し、気になることは全員で話し合う。そういう環境をつくることでより良いサービスの提供につながっています。

(取材／2022年2月)

Column

「車いすバスケットボール」は、その名の通り車椅子で行うバスケットボールだ。障がい者が楽しめるスポーツとしてパラリンピック競技にもなっている。しかし、動きの速さが求められることやゴールの位置が高いことなどから、上肢に障がいを持つ人が気軽に参加できないという現状がある。

その問題を解決するために考案されたのがツインバスケットボールだ。ゴールを2つ設けたり、障がいの程度に応じてシュートの方法を選べるルールを設定したりすることで、上肢に障がいがあっても楽しめるようにした。

金井社長はこのスポーツの連盟で役員を務めた経験を持つ。ルール作りから参加し、普及のために尽力した。また、競技をする中で仲間意識が芽生え、助け合いの精神が生まれたという。

「障がいの程度にかかわらず、皆が参加してくれるのが嬉しい」——これまでの経験を原動力に、工夫次第で誰もが輝ける場を作り、真の意味でのバリアフリー社会を目指す社長。同じ志を共有する仲間と共にこれからも前進し続ける。